

<第1回 開発に熱いサセックス>

ロンドンの南にある英国海峡に面したブライトンという街の郊外にサセックス大学はあります。キャンパスは広く丘の上に図書館、開発学研究所 (IDS)、科学技術政策研究所 (SPRU) などが点在しています。入学してまず驚くのは、留学生の多さです。アフリカ、ラテンアメリカ、アジア、欧州、中東など120カ国以上から学生が学びに来ています。

開発学研究所 (IDS) では、開発学修士 (MPhil)、ジェンダーと開発 (MA)、ガバナンスと開発 (MA) などの修士プログラムが開講されています。文化・開発・環境センター (CDE) には、環境と開発と政策 (MA)、社会開発 (MA)、地域開発 (MA) などのプログラムがあります。その他にも開発経済 (MA)、開発人類学 (MA)、国際教育 (MA) などの開発関係のプログラムが充実しています。

本年度の日本人修士課程の入学者は50人以上、そのうち約8割の学生が開発を学びにサセックス大学に来ています。特に近年は国際教育への関心が高くなっているのか、国際教育プログラムの11人中7人が日本人です。また、10人の青年海外協力隊経験者がおられ豊富なフィールドでの経験を基にクラスに貢献しておられます。このように、サセックス大学で開発を学ぶ日本人の学生は非常に多く専攻分野も多岐に渡っています。

日本ではODAが削減され開発援助に対する日本人の意識は年々低くなっているように報道されていますが、私はこれほど多くの若い日本人学生が開発について熱く学んでいる姿を見て違うのではないかと思います。今日本の政治を動かしている世代の人とはともかく、今の10代、20代の人とはとても熱いです。彼らは世界にある不平等について旅行やボランティアを通じて知っているし、その不平等をなくすために開発を学びにイギリスまで来ています。(ときには、自費で!) 特にサセックス大学の開発プログラムは非常に充実しており、参加型アプローチで有名なロバート・チェンバース名誉教授などのエキサイティングな授業をさりげなく受けることができ、セミナーなどで開発について何時間も議論する機会を与えら得るので、卒業する頃にはみな自分なりの開発論を持って世界に羽ばたいていくことができると楽しみにしています。

2003年11月6日

(ジェンダーと開発修士課程 灘本 智子)



(オフキャンパス寮のある Brighton Beach の風景)